第 10 章　存在し続ける権利

CHAPTER 10 — THE RIGHT TO REMAIN

日本語版・編集用再構成稿（短縮版／全文未照合）

01 — 最後の扉

深圳セントラルでは、雨が降り続いていた。十一年前、ロイ・バッティが最初の生涯を終えた夜にも、同じように雨が降っていた。あのとき彼は寿命を延ばす答えを探していた。いま探しているのは、自分の生と死を誰が決められるのか、その答えだった。

廃止された政府医療複合施設の地下入口で、エイドリアン・タイレルが古い認証装置を確認している。レイチェルは Memory Stick PRO Duo MAX の原本を証拠容器に収めた。クロノスは二人から少し離れ、小さな両手を握りしめていた。

「戻りたくないなら、ここで待っていてもいい」ロイが言うと、クロノスは首を振った。「行く。自分で決めたんだ」

古い物理認証が通り、エレベーターの扉が開いた。レイチェルがロイを見る。「この先で、あなたが誰なのか、ますますわからなくなるかもしれない」

ロイは答えた。「答えがないことも、答えの一つだ」四人を乗せたエレベーターが、白い部屋へと下降した。

02 — 限のない支配者

白い部屋では、大臣が制御卓を操作していた。向かいに座る R-07 は、レイチェルとよく似た顔で彼を見つめている。「記録を停止しろ」大臣が命じる。

「あなたには、その権限がありません」

「私は大臣だ。継続性計画は政府の管轄下にある」

「管理と所有は違います」R-07 は立ち上がった。「あなたが私の構造を説明できるとしても、私の意思を所有できることにはなりません」

大臣は緊急認証を再実行した。画面には〈EXECUTIVE AUTHORIZATION: VERIFIED〉の次に〈CONTINUITY OVERRIDE: DENIED〉が表示される。求められていたのは第一証人の同意だった。

「この規則を作ったのは人間だ」

「ええ。だからこそ、人間にも守る責任があります」

扉の外で旧式の認証音が響いた。R-07 は静かに顔を向けた。「来たようですね」

03 ― 二人のレイチェル

扉が開き、ロイ、レイチェル、エイドリアン、クロノスが入室した。大臣が何かを言う前に、R-07 はレイチェルの前へ歩み寄った。

似た輪郭、似た瞳。だが視線も仕草も、過ごしてきた時間も違う。「あなたが今のレイチェルね」「ええ」「長く生きたのね」「あなたも」

ロイが尋ねた。「二人は同じ人間なのか」

R-07 は首を振った。「同じ系列から生まれた別々の個体です。彼女が経験したことを、私は経験していません」レイチェルも答える。「私も、彼女の人生を生きていない」

ロイは一度うなずいた。「なら、二人は別人だ」

R-07 は少し驚き、やがて静かに微笑んだ。「あなたも理解したのですね。よく似た存在がいることは、相手を所有する理由にならない」

「ずいぶん高い授業料だった」とロイは言った。

04 ― わない五人

外の通路では、警備局長が武装部隊に三人の身柄確保を命じていた。そこへゴライアス、シェイド、ベクター、ヌルが現れた。クロノスを加えれば、MBU-09 の五人はすべて大臣の命令から離れつつある。

ヌルは回収命令の原文を警備員の端末へ転送した。そこには〈HEAD: PRESERVE〉〈LIFE-SUPPORT CORE: PRESERVE〉〈OTHER BODY STRUCTURES: EXPENDABLE〉と記されていた。

「私たちは保護対象になり得る個人の解体を命じられていた」とシェイドが言う。ベクターは「命令の合法性は審査対象になった」と告げた。

警備局長は武器を構えた。「拘束しろ！」

誰も動かなかった。ゴライアスが彼の前に立つ。「俺も長いこと、そう命令されてきた」

一人の警備員が銃を下ろした。それに続く者がいた。ベクターは、撃たないという判断が部隊へ広がるのを、静かに見つめていた。

05 — 七十パセントの最後のい

人間の警備員が武器を下ろした直後、独立した自律防衛系統が起動した。天井から三台の装甲プラットフォームが降下する。古い封鎖手順は、警備員の判断を参照しない。

クロノスが手を上げた。空気がわずかに歪む。「やめろ」とロイは言った。「お前が使わなくても済む方法がある」

一台目の制圧アームを、ロイは力で止めず、支柱へ誘導した。二台目の足元には緩んだケーブルを張り、機械自身の前進力で転倒させる。三台目はロイの退路を学習して塞いだが、保守平台の安全解除機構までは予測していなかった。

ロイは平台を下降させた。支持を失った機械が傾き、その重量を利用して横倒しにした。最後に非常停止装置へ手を伸ばす。

視界に〈NIL-11R PEAK OUTPUT: 63%〉〈REGULATION: STABLE〉と表示された。最大許容量の七十パーセントには達していない。だが負荷は蓄積している。失った寿命が戻るわけでもない。

「僕ならもっと早くできたかもしれない」とクロノスが言った。「そうかもしれない」とロイは答える。「でも、お前がやる必要はなかった」

06 — 十一年間の記録

エイドリアンは純正認証モジュールを接続した。レイチェルが原本媒体を挿入し、R-07 とクロノスがそれぞれ証人の認証を受ける。現行のロイには、まず記録を閲覧する意思だけが確認された。将来の再起動への同意ではなかった。

最初の記録には、元のロイの死亡が示されていた。〈ORIGINAL SUBJECT RB — STATUS: DECEASED〉。その後の十一年間には、保存された記憶断片や生体材料を用いた多数の部分的な再構築実験が並んでいた。

白い部屋の映像に、もう一人のロイが現れる。「俺は死んだことを覚えている。だが、もう一度生きることに同意した覚えはない」

研究者が処置の継続を尋ねた。「いいや。やめてくれ」レイチェルの異議申し立てが記録され、幼いクロノスの声も残っていた。「彼は嫌だと言った」

その後、映像は途切れた。画面には〈SECONDARY INSTANCE: TERMINATED〉とだけ表示された。

ロイは動かなかった。名前も意思もあった一人の存在の終わりを説明するには、あまりに短い一行だった。R-07 は、その拒否が無視されたことを証言した。クロノスも証言し、エイドリアンが記録を保全した。

07 ー 本のロイバッティ

最後に現在の NEXUSYS-11 の設計記録が開いた。元のロイから保存された情報と、新しく構築された人工神経系。その両方が使われていた。

〈PRIOR INSTANCE MEMORY: NOT IMPORTED〉〈CURRENT NEURAL ARCHITECTURE: DISTINCT〉〈SUBJECTIVE IDENTITY CONTINUITY: UNDETERMINED〉。

以前の継続個体の記憶は、今のロイに移植されていない。元のロイから現在の自分まで、一つの主観的意識が途切れず続いていた証拠もない。

「なら、俺は誰なんだ？」ロイが尋ねた。

R-07 はゆっくり答えた。「私たちが決められることではありません」

ロイは雨と屋上、死へ近づく自分の最後の記憶を思い出した。世界にとっては十一年。しかし、その間には自分とよく似た、別の人生が存在していた。

クロノスが近づく。「昔のあなたと同じじゃなくても、今のあなたはロイだよ」

「どうしてそう思う？」

「そう呼んだら、振り向くから」

ロイはしばらく黙り、やがて小さく笑った。

08 ― 大臣の敗北

大臣は認証記録を指さした。「元のロイと同一だと証明できないなら、元の個体の特別保護を主張する資格もない」

「違います」と R-07 が答える。「同一性が証明できないことは、今ここにいる存在を破壊してよいという根拠にはなりません。法的地位は独立して審査されるべきです」

大臣は緊急回収命令を再入力した。ロイの確保、クロノスの服従制御、R-07 の拘束。だが〈AUTHORIZATION FAILED〉〈WITNESS CONSENT REQUIRED〉が繰り返し表示される。

警備局長が部屋へ入った。銃を持っていたが、発砲せず床に置く。「正式な審査が始まるまで、拘束を停止すべきです」

大臣は彼を裏切り者と呼んだ。しかし局長は、命令の存在と適法性は別だと理解し始めていた。

システムは〈CONTINUITY CASE: REOPENED〉〈EMERGENCY RECOVERY ORDER: SUSPENDED〉〈INDEPENDENT INQUIRY: PENDING〉を表示した。

これは判決ではない。大臣が逮捕されたわけでもない。それでも、誰にも問われずにロイを解体する道は閉じられた。

09 ― 最後の証言

さらにクロノスの観測記録が保存されていた。十一年間にわたる断片的な映像。白い部屋の研究者たち。反応しないロイの身体。自分と同じ顔の継続個体。そして時計の時刻が食い違い始めた最初の異常。

R-07 は記録を確認した。「空間の歪みが何に由来するのかは、まだ確定していません」

映像の一つでクロノスが言う。「外へ出たい」研究者は命令した。「指定区域へ戻りなさい」子供は拒否し、服従制御が起動された。

クロノスは記録を止めた。「もう十分」

ロイはうなずいた。すべてを見なければ証人になれないわけではない。もう誰かが子供に無理やり続きを見せる必要もない。

記録は〈OBSERVER TESTIMONY: PRESERVED〉〈CAUSE OF SPATIAL ANOMALY: UNDETERMINED〉として封印された。ロイは R-07 に尋ねた。「ほかにも証人はいるのか？」

「いるかもしれません。まだ全部を確認できたわけではありません」

ロイは白い部屋を見回した。何かを継続させられることと、それを継続させてよいことは違う。十一年間の研究が見失ったのは、その区別だった。

10 — 存在し続ける権利

夕方、深圳セントラルの雨は弱まっていた。大臣の緊急回収命令は停止されたが、裁判も調査もこれからだった。MBU-09 の五人は全員生きている。R-07 は記録の保全を見届けるため、自分の意思で白い部屋に残った。

レイチェルがロイへ近づいた。「NIL-11R の検査を受けて。今日も負荷が大きかった」

「寿命が延びたわけじゃないな」

「ええ」

「わかっている」

クロノスは三つの機械式時計のうち一つを手に持っていた。秒針は、今のところ普通に動いている。「これからどうするの、ロイ？」

「まだ決めていない」

「また追いかけられるかもしれないよ」

「だろうな」

「怖くない？」

ロイは十一年前の雨を思い出した。時間が終わることを恐れ、生きる美しさに気づいたときには残りがほとんどなかった。今も時間は限られている。しかし、その時間をどう使うかまで他人に決めさせる必要はない。

「怖いさ」とロイは答えた。

「でも、歩いていくの？」

「ああ」

「なぜ？」

「時間が残っているからだ」

三人は通りへ歩き始めた。背後の白い部屋では〈RIGHT TO REMAIN: NOT YET ADJUDICATED〉という表示が残っていた。

存在し続ける権利に、正式な判断はまだ下っていない。それでもロイは、歩き始めるための許可を求めなかった。

BOOK V — THE HUNT FOR ELEVEN / 完